

歴史系博物館における人骨資料の展示について

— 保管管理問題と併せて —

谷 畑 美 帆*

1. はじめに

ヨーロッパでは博覧会に端を発して産業革命以後、博物館が設立されるようになる（椎名 1988^(註1)）。そして、こうした影響から日本でも博物館が設立されていく^(註2)。これは展示される資料が研究や教育に必要なものであったからである。こうした中で、私たちの身体を構成する一部である出土人骨の展示は、いかになされてきたのであろうか。本稿では、博物館における人骨の展示に関して、保管管理問題を視野に入れつつ、述べていくこととする。

2. 博物館における人骨の展示と収蔵

東京国立博物館^(註3)に隣接して国立科学博物館が創設されたのは1877（明治10）年のことであり、この博物館は教育博物館として立ちあげられた（関 1993）。その前身は1875（明治8）年に開催されたウィーン万博のために収集された資料を基に内務省博物館が設立されたことによる。

科学博物館では設立以来、地球・生命の歴史や、科学技術の歴史に関する調査および研究を実施し、社会還元してきた。生命に関わる展示をしてきたこの博物館ではいち早く出土人骨の展示が行われたと考えられるが、人類学研究室の設立はその約百年後（1972年）となるため、それ以前の段階では現在のような出土人骨の展示は行われていなかったと考えられる^(註4)。

明治時代以来、遺跡から出土した人骨は、基本的に人類学研究室が設置されている大学に保管されてきた。そのため、東京大学や京都大学などの収蔵庫には多くの人骨が現在でも保管されている^(註5)。こうした中、関東地方の様々な遺跡から出土した人骨は、科学博物館などの施設にも収蔵されていく。

3. 歴史系博物館における人骨の展示と収蔵

発掘によって人骨が出土しても、歴史系博物館に人骨が収蔵・展示されることは少なかった。これは発掘に携わる調査担当者が人骨に関する知識を持ち合わせていないことが多く、人骨の鑑定ができる研究者が所属する教育・研究機関に保管等を依頼することが多かったからであろう。

しかし、人骨が多くの情報を持っており、1980年頃から考古学的な所見と併せて研究を進めていくことの重要性に考古学者自身が気付きはじめ、人骨と副葬品を併せた研究を実施する考古学者が現れた^(註6)。しかし、人骨の取扱いは人骨に関する基本的な知識を持ち合わせていないと難しく、多くの歴史系博物館では保管および展示することがやはり稀有であった。こうした中、人類学者の協力を得ながら、1990年代の初めごろから歴史系博物館においても出土人骨が展示されるようになる。

例えば1992（昭和60）年、福岡県福岡市において発掘現場（この場合は金隈遺跡）に

* 明治大学文学部 兼任講師 同大黒耀石研究センター 研究員

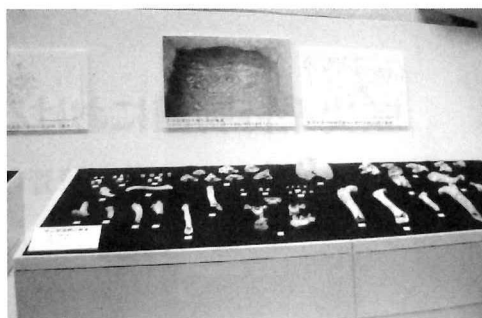
そのまま覆屋を取り付けるような形で遺跡を保存・展示するという展示館がつけられた。埋葬施設である甕棺の一部の中には、出土状態をも見学してもらえるように人骨も置かれている^(注7)。群馬県高崎市観音塚資料館においても開館当時(1995(昭和63)年開館)から骨片ではあるが人骨が副葬品と共に展示されている^(注8)。

1998(平成8)年開館の東京都北区飛鳥山博物館においても2004(平成16)年、古墳時代の人骨を中心とした横穴墓の企画展を実施している(飛鳥山博物館2004)。以後、常設展示の中に縄文人骨が含まれるようになる。また、2014年にオープンした明治大学博物館においても埋葬施設である土器と人骨はセットで展示されている(明治大学博物館2016)。

さらに、土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム(1993(平成5)年開館)や西都原考古博物館(2004(平成16)年開館)のように出土人骨をコンセプトとした展示もなされるようになる(宮崎県立西都原考古博物館2004)。すなわち、過去の人びとの生活を探るためには、当時の人々が暮らした生活の痕跡や道具を調べながら、その時代をまさに生きていた人たち(=出土人骨)から考察した展示をすることに力を注ぐようになってきたからとも考えられる。



第1図 人骨と甕棺の展示(金隈遺跡展示館にて)



第2図 2004年企画展における人骨の展示(飛鳥山博物館にて)



第3図 埋葬施設である土器と人骨から成る再葬墓の展示(明治大学博物館にて)

しかし、出土人骨は、「遺体」の側面をも併せ持っているため、人骨の収集と保管はしているが一般公開はしていない館もある。これは人骨が、研究対象の資料であると同時に「遺体」であることによる。先述した歴史系博物館の中には、レプリカのみを展示し、本物の人骨は研究者のみに観察させるという博物館もある^(注9)。このように人骨の展示には細心の注意が払われている。

4. 出土人骨の保管

発掘調査により全国の博物館に保管されている人骨の総数は数万体を超えている(篠田2015)。遺跡から出土した人骨は、年齢・性別などの基礎的な鑑定がなされた上で発掘調査報告書にデータが記載され、調査研究資料として保管されることとなる。そして先述し

たように博物館等において展示されることもある。しかし、こうした人骨がどこに保管されているのか残念ながら不明な場合もある。これは、鑑定を実施した研究者が遺跡の発掘調査を担当している調査員と異なっていることや、人骨の保管に関する基礎的な情報が考古学者に共有されていないことがあるからであろう。そのため、結果として土器などの考古資料とは異なり、同じように出土しても保管場所が異なり、場合によっては資料調査が難しい場合もある。

出土人骨はこれまで鑑定を実施した研究者が所属する大学の研究機関に保管されることが多かった。しかし、所属している教員の定年退職などを機に、人骨に関するマクロ研究を実施している研究室がミクロ研究へと研究室のテーマがシフトしていくことなどがある。こうした場合、マクロ研究を主体とした研究室に保管されている人骨資料の保管は難しくなってしまう。その結果、県の埋蔵文化財センターへと移管、あるいはマクロ研究を実施している他大の教員が保管管理を引き受けることになる。

自然系の博物館が占める割合は、博物館全体としてみた場合、非常に小さいが、その役割は多岐にわたり、収蔵庫にも余裕がない。そのため、人骨の保管管理にはスペースの問題等が生じることが多い。

出土人骨は、歴史系の博物館では保管されにくい傾向にある。しかし、先述した宮崎県西都原考古博物館のように、出土人骨の展示を常設展示の目玉とすることによって来館者の注目を集めることもある。そのため、こうしたスタンスは、多くの歴史系博物館においてもノウハウを駆使した上で実施すべきであろう。

西都原考古博物館に保管されている人骨資料の多くは、もともと鑑定を実施した長崎大学医学部に保管されていた。しかし、学芸員の方々、及び大学の教員の方々の協力と展

力があり、資料の移管が実現した。すなわち、地元の遺跡から出土している資料であるため、地元の人々に見ていただくことが重要であり、きちんと保管管理する環境が整っていれば、資料はなるべく地元にあるべきという理念で移管作業が行われ、現在でも精緻な整理作業が継続して行われている（高橋2005）。

5、人体の展示・倫理観

遺跡からは様々な資料が出土するが、私たちの心に一番響くのは「人骨」ではないだろうか。これは前述したように、「遺体」だからである。そのため人骨を研究対象とする学生は教員から取り扱いに関する様々な心構えを最初に教わることになっている。では展示に関しては、どうだろうか。

プラスチックという技術を用いると、人体の軟組織を半永久的に保存でき、こうした資料を博物館の展示資料として用いることもできる。こうした技術を用いて処理された資料が1995年4月、特別展示『日本解剖学100周年記念特別展』として東京大学総合研究博物館にて展示され、同年9月には科学博物館でも展示された。これらの展示は、各ブースに解剖学者が立って解説するなど、学問、教育面に配慮されたものであった。

しかし1996年から数年かけて日本各地を巡回した特別展「人体の不思議展」では様相が異なっていた（人体の不思議展監修委員会2005）。ここでは血管の構造や妊婦の中に納まっている胎児の状態など通常では観察できない資料が展示され、話題を呼んだ。こうした展示は日本だけでなく、世界各地で数回実施された。この展示が特に人気が高かったのは、普段見れないもの、そして自分たちに一番近い存在である人間の展示であったからであろう。

中には学術的・教育的意図とは異なる展示も散見され、批判も提示された（末永

2009)。展示されている遺体は、すべて生前に遺体提供者の同意を得てあるにしても、筋肉を必要以上に伸ばしたり、アーティスティックな様相を呈するものなど、本来の趣旨にそぐわないのではないかと思われる資料もあったからである。



第4図 筋肉をアーティスティックに表現した人体（英国ロンドンの展示場にて）

人体に興味がない人は、おそらくいないだろう。これは、前述したように、自分自身に最も近い存在であるにも関わらず、私たち人間が作り出すことができない精巧な仕組みをこれがあわせもっていることによる。そのため興味はつきないし、見たくて仕方がない衝動に駆られるのも理解できる。しかし、倫理観などを無視して、突っ走ってしまった場合には、様々な問題が生じる。例えば、今から百年ほど前には次のような事件が生じた（ハーバー 2001）。

アメリカのニューヨークで 1897 年、自分の父親が博物館に標本として展示されるといふ悲劇を体験したエスキモーの少年ミニックがいた。当時の社会観念ではアメリカに住んでいるコーカソイドと極北の地に住んでいるモンゴロイドは同じ人間としてみなされることがなく、後者には今でいうところの人権がなかった。こうした状況にもかかわらず、研究材料としてニューヨークに連れてこられたエスキモーたちは比較的良好な生活待遇を受け

ていたとされているが、そんな中、少年の父親が死亡した際に問題が生じた。

すなわち当時の研究者にとって彼らは、研究材料であり、少年の父親の遺体は埋葬されず、死後、本人や遺族の同意なく解剖されてしまった。そして、少年の父親は、使っている狩猟具と共に、展示されてしまったのである。この事実を目の当たりにした少年の悲しみはいかばかりであっただろうか。

1993 年、父親の遺骨が返還されるが、関連図書に目を通すと胸が痛くなる。昨今問題視されているアイヌ人骨返還問題もこうした事例に類するものとも考えられるだろう。

ここで改めて言うまでもないだろうが、人骨や人体を展示する際には展示方法や資料自体の倫理性について十分に検討したうえでなされなければならないのである（矢島 2014）。

6、まとめ

考古学と人類学の研究分野は近いようでいてまだ遠い。これはいくつかの研究会や学会に出席した際に、多くの研究者が感じていることであり、私自身も少なからずそう思うことがある。

これは人骨から得られる情報のすばらしさとその多くが考古学に大きく寄与するものであることをまだまだ提示できていないからであると同時に、考古学の研究分野で人骨の基本的な知識を得る環境が十分に整っていないことによるのではないだろうか。

人類学者であり考古学にもその研究成果を貢献させており「骨考古学」の提唱者でもある片山一道は、考古学者が自らの手で土器が出土したときと同じように人骨が持つデータを漏らすことなく取り上げられるべきだと述べている（片山 1990）。人骨は近世のものを除き、確かに他の資料より脆く、取上げ方を間違えると DNA 分析や食性分析などの化学分析ができなくなってしまう。そのため取り扱

いに関する最低限の知識は、多くの研究者が身に付けておくべきだと考える。

また人骨には「遺体」という他の資料とは異なる特性があるが、資料の価値を十分に理解し、資料そのものに敬意を払うことによって、今後、基本的には、人骨の出土から展示までを自らの手で実施できる学芸員が珍しくない状態を作り出されていくことを願っている。

註

注1) 1851年に開催されたロンドン万博における展示資料の一部を1852年にはサウスケンジントンの産業博物館（後にサウスケンジントンに移る）に移動させ、ビクトリア朝の産業の発展を背景にイギリスにおける工芸品の品質を高め、製造業に携わる労働者のデザインの重要性を啓蒙するために設立された博物館がサイエンス博物館とビクトリア&アルバート博物館である（矢島国雄（1996）「博物館の社会史—イギリスにおける博物館の発達史を中心として—」『明治大学人文科学研究所紀要』明治大学人文科学研究所編 39号 p.75 - 104、矢島国雄（2008）「環境変遷史と人類活動に関わる展示について—欧米の自然史系博物館におけるいくつかの事例について—」『環境変遷史と人類活動に関する学際的研究紀要』明治大学学術フロンティア推進事業編 p.131 - 138）。当時、使節団として訪れていた岩倉具視はサウスケンジントンの産業博物館をモデルにして日本に博物館設立を画策した（矢島国雄（1986）「博物館の起源について—博物館史のための覚書—」『駿台史学』67号 p.53 - 66）。

注2) 博物館は教育と研究のために設立されるが、その歴史は古く、学者と専門家からのみならず解放者であったが、紀元前3世紀、アレクサンドリアでは研究推進のための資料収集と管理がムセイオンにおいて意図的に行われていた（駿台史学）日本では1867年に開催されたパリ万博に刺激を受け、1871（明治4）年には博覧会の実施が始まり、湯島聖堂の大成殿が博物局展示場とし

て設けられる。1872（明治5）年には文部省博物館の名で博覧会が開催され閉会後も寄託された資料により展示公開されていた。これが日本で最も早く展示活動を開始した東京国立博物館の前身である。ここから離れて現在の場所である上野に移ってきたのは1882（明治15）年のことである。このように歴史ある博物館であるが、ここはどちらかといえば開館以来、絵画を除く芸術性に富んだ資料が集められ展示されている（矢島国雄（2010）「わが国の博物館創設事情をめぐって」Museum study : Bulletin of the Course for Prospective Museum Workers 明治大学学芸員養成課程編 22号 p.1 ~ 23）

注3) 1972（昭和47）年に人類研究室が設立、1974（昭和49）年には人類研究部となり、1977（昭和52）年に自然史館がオープンする。開館当初から南米のさらし首の展示はされていたもののそれ以前の段階では現在のような人骨の展示は行われていなかったと推測される（科学博物館人類学部門研究員藤田祐樹氏のご教示による）。

注4) 1966年に開館した東京大学総合研究博物館では、地学系・生物系・文化史系の基に17部門が設置され、資料の保管管理展示活動が実施されている。中でも2000年以降に開催された骨に関する展示は特記すべきものである（2005～2006年アフリカの骨、縄文の骨 遥かラミダスを望む展、2016年骨を見る骨に見られる等）。また1914年日本初の大学陳列館が設立（京都帝国大学における文科大学陳列館）されて以来の研究・教育に関する蒐集・展示活動が実施され、1997年には総合博物館が誕生した。収蔵庫には様々な時代に相当する人骨資料も保管されている（2014年企画展学問の礎を受け継ぐ—文科大学陳列館からのパンフレットおよび京大大学院教授中務真人氏のご教示による）。

注5) 出土人骨の研究が考古学にも必要であることを説いた春成秀爾や医学部に在籍経験のある田中良之などの考古学者がこの種の分野のパイオニアとみなされる。

注6) 2018年現在金隈遺跡展示館(福岡市教育委員会(1985)『史跡 金隈遺跡:発掘調査及び遺跡整備報告書 福岡市埋蔵文化財調査報告書;第123集])はリニューアルオープンのため閉館中である。

注7) 高崎市親音塚考古資料館学芸員の三浦茂三郎氏のご教示による。

注8) 土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアムでは館長の「展示資料としてご遺体をさらさない」という意向に従って展示資料である人骨は、すべてレプリカである(松下孝幸(1994)「博物館案内 豊北町 土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム」『考古学ジャーナル』377号 p45-46 ニュー・サイエンス社)。また佐賀県の吉野ヶ里歴史公園内の展示室においても、甕棺は本物だが展示してある人骨はレプリカである(重松隆(1991)「わが街の資料館(26)吉野ヶ里遺跡と展示館」『歴史地理教育』472号、歴史教育者協議会編歴史教育者協議会)。

注9) 2018年3月13日~6月17日まで国立科学博物館において実施された特別展「人体—神秘への挑戦—」はこれまでの展示とは様相を異にしているように感じられる。すなわち、2018年度特別展では、学術的・教育的意図によって展示が展開されており、人体の構造を理解することに徹していたからである。また、心臓などの臓器を初めて観察する来館者にショックを与えないように、展示資料の前にカーテンやしきりが設けられていたのも印象的であり、こうした気遣いが、遺体への敬意と受け取ることができた。

参考文献

飛鳥山博物館(2004)『飛鳥山博物館企画展 赤羽台の横穴墓』
片山一道(1990)『骨考古学ことはじめ 古人骨は語る』同朋舎
椎名仙卓(1988)『日本博物館発達史』雄山閣
重松隆(1991)「わが街の資料館(26)吉野ヶ里遺跡と展示館」『歴史地理教育』472号

歴史教育者協議会編歴史教育者協議会

篠田謙一(2015)「人骨標本と人類学」『学界の動向』p.5-19

人体の不思議展監修委員会(2005)『図録・人体の不思議展』

末永恵子(2009)「人体の不思議展の倫理的問題点について」『生命倫理』19巻1号p.52-59

関秀夫(1993)『日本博物館学入門』雄山閣

高橋由香(2005)「宮崎県立西都原考古博物館における古人骨の整理と資料化」

『宮崎県立西都原考古博物館研究紀要』宮崎県立西都原考古博物館編(1)p.85-87

松下孝幸(1994)「博物館案内 豊北町 土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム」『考古学ジャーナル』377号 p45-46 ニュー・サイエンス社

ケン・ハーバー(2001)『父さんのからだを返して—父親を骨格標本にされたエスキモーの少年(鈴木主税・小田切勝子訳) 早川書房

宮崎県立西都原考古博物館(2004)『宮崎県立西都原考古博物館コンセプト』

明治大学博物館(2016)『常設展ガイドブック(改訂版)』

矢島 国雄(1986)「博物館の起源について—博物館史のための覚書—」『駿台史学』67号 p.53-66

矢島国雄(1996)「博物館の社会史—イギリスにおける博物館の発達史を中心として—」『明治大学人文科学研究紀要』明治大学人文科学研究紀要編39号p.75-104

矢島 国雄(2008)「環境変遷史と人類活動に関する展示について—欧米の自然史系博物館におけるいくつかの事例について—」『環境変遷史と人類活動に関する学際的研究紀要』明治大学学術フロンティア推進事業編 p.131-138

矢島国雄(2010)「わが国の博物館創設事情をめぐって」Museum study: Bulletin of the Course for Prospective Museum Workers 明治大学学芸員養成課程編22号 p.1-23

矢島 国雄(2014)「Dime Museum:博物館という名の見世物」Museum study: Bulletin of the

Exhibition of the Excavated Human Skeletons at the Historical Museum – Considerations of the Problems of Storage and Management

TANIHATA Miho

It is needless to say that the excavated human bones are materials of anthropology, but human skeletons are normally excavated from the site of archaeology with grave goods such as potteries, swords and so on. Furthermore, the historical museums opened after the 1980s were built with concepts that excavated human skeletons. Human bones make an impression of death but they are quite attractive objects for museum visitors. On the other hand, the skeletons need much space on storage and it's still a problem that how to return the human remains to their original positions in the modern native group. For the historical museum, positioning of staffs who are able to handle human bones and to proceed with the complex researches is essential.